

鈴木秀雄氏旧蔵「すがも新聞」 関連資料の寄贈受入れについて

「すがも新聞」は巣鴨プリズンに収容されていたBC級戦犯が編集・発行していた獄中紙であり、1948年6月5日から1952年3月29日まで193号がワラ半紙にガリ版刷りで発行された。復刻版(不二出版)は学内他図書館・室で所蔵されているものの、原紙については全国的に見ても図書館所蔵目録の登録がない。社会情報研究資料センターでは、発行に携わっていた鈴木秀雄氏旧蔵の「すがも新聞」原紙(創刊号～119号)及び付随資料*The Way of Deliverance*について、マイアミ大学英文学、人文

学名誉教授鈴木美穂子氏から寄贈の打診をいただいた。付随資料は、巣鴨拘留所の教誨師がA級戦犯処刑に立ち会った際の記録図書「平和の発見」の英訳版で、やはり鈴木秀雄氏が英訳に携わったものである。当センターでは、原紙の国内所蔵状況や歴史的な来歴を踏まえて検討し、「鈴木秀雄氏旧蔵『すがも新聞』関連資料」(貴重書指定)として受入れることになった。また、これらの資料の来歴を記録する目的で、鈴木美穂子氏からセンターニュースに寄稿していただいた。

「すがも新聞」、*The Way of Deliverance*、と父鈴木秀雄

鈴木美穂子

父鈴木秀雄(1917-2015)は1940年に東京大学法学部卒業後、大蔵省に入りましたが、まもなく第二次世界大戦開戦のため海軍に入隊し、戦後、主計少佐としてフィリピンでの米兵捕虜待遇責任を問われて、1946年から1952年のサンフランシスコ講和条約発効の直前に釈放されるまで巣鴨で六年間過ごしました。このたび父がその間に携わった「すがも新聞」を兄鈴木竹雄(1905-1995)に送るために集めた冊子を東大の社会情報研究資料センターが受け入れて下さることになり、父は喜んでお思います。「すがも新聞」の事は度々話には聞いていましたが、遺品を整理しているときに思いがけなく発見しました。思いの外しっかりと紙に小さなガリ版の文字が所狭しと印刷された分厚い冊子は、アーカイブに残されたドキュメントに基づいた研究を重ねた私自身の経験から、貴重な終戦直後の記録であり、処分してしまうのはあまりにもったいないと思いました。幸い、私の友人で父も面識のあった岩井克人東大経済学部名誉教授が社会情報研究資料センターに打診して下さった結果、この原本は資料として価値があると言う有難い裁断をいただきました。東大で三十六年にわたって商法の教鞭を取った竹雄伯父は在学中の父を教え、フィリピンでのBC級戦犯裁判の際は現地まで足を運んで色々弟の為に骨を折ってくれたと聞きました。父は巣鴨拘留中、戦争中内閣顧問を務めた父親の鈴木忠治(1875-1950)をなくしました。八人兄弟のうち、三男の兄竹雄との強い絆は「すがも新聞」の「社員名簿」に父が竹雄の住所を留守宅として載せていることでも計り知られます。父は英国法のコモン・ローに興味があり、大学に残るように伯父の恩師の田中耕太郎先生に勧められ、真剣に検討したそうです。そういう学問に惹かれ、私自身が大学院に進む時励ましてくれた父が兄弟のなかただ一人学者であった伯父と特別親しかったのは、当然かもしれません。なお、竹雄伯父はお

そらく父が巣鴨から出した手紙と共にこの冊子を弟が出所した時に返したのだと思います。この手紙類は残念ながら現在行方不明です。

父が創刊号から記者、また翻訳陣として携わった「すがも新聞」は社説、連載小説、短歌、俳句、漫画を掲載することによって、驚くほどヴァラエティに富んだ文化の場を「社員」や読者に提供したことが窺い知れます。毎週欠かさず4頁(時には6頁の特別号)をびっしり埋める新聞の出版は巣鴨に拘留された人々がいかに積極的に知的に豊かな生活を送っていたかを証言しています。特筆すべきことは、米軍当局が創刊号に奨励の言葉を寄せ、また創刊2年を記念する103特別号の「褒辞」に「本紙がここに居る人々の声たる機能を継続することは米国的及民主的な言論の自由及出版の自由の概念と完全に一致する」と言っている事です。GHQ当局の「すがも新聞」奨励は戦後日本においてデモクラシーを定着させるための手段であり、事前検閲はなかったようですが、「多くの有益な記事や短歌を読む事は私の喜びであった」とあるように、当局は目を通して、「社員」と寄稿者たちは、事後検閲にひっかからないように当然気を遣ったと思います。しかし、「発刊までの経過」を辿った記事(103号)に、新聞の発行は当局から選挙された有志への提案であって、「用紙とか必要なものは全部支給する」が、「この新聞は所外にも出るのだから占領政策に対する批判や死刑囚、A級の事などにはタッチしないやうに」との具体的な「注意」があったということは、その他のトピックは比較的自由に扱えられたのかもしれない。

巣鴨では新聞の他、お互いに色々な知識を分かち合う「巣鴨学園」が発足し、父も参加しました。英語を集中的に勉強した様子が遺品の中にあつたイディオムやスラングを書